

3. 授業「人づくりのわーく」をふりかえって

1. 授業「人づくりのわーく」

3年生のカリキュラムに選択で「国語表現」が2単位設置されている。選択者は53人、2講座展開である。分け方は任されているので、もう一人の担当教師と相談して、機械的に2つに分けるのではなく、「話す 聞く」を中心にした講座と、「書く 読む」を中心にした講座を設定して生徒に選択させた。結果は、「話す 聞く」講座は男子10人女子5人であった。学年部長として1年から持ち上がりの学年で、生徒との関係も良好だったので意外だった。もちろん小論文入試を意識した生徒もいるだろうが、多くは受身的で「話す」と言えば大勢の前での発表をイメージして敬遠したのだろう。

それだけに、集まったメンバーは濃かった。去年担任した生徒が多く、その中でも座学よりも身体を動かすことの好きな生徒が多かった。じっくり落ち着いて自己洞察するような雰囲気は望めない。面白くて為になるという難しいバランスが必要であった。1時間1時間が勝負であった。

2. 「人づくりのわーく」の準備

「人づくりのわーく」の準備は前年の夏休みから始まった。4年前にも同じ「国語表現」の授業で「こころのグループワーク」と自称する授業をしたので下地はあった。ただ、その時は借り物の教材が多く、一輪車操業だった。今度は自前の教材でもう一度チャレンジしたい、という思いはずっとあった。プレストレーミング法で自分にできること、生徒に必要な力をカードに書き出し、分類し、順序を決め、週に2時間年間25週分のプログラムを作って行った。

冬休みからワークシートの作成に取りかかった。春休みには1学期分のワークシートを用意した。しかし、毎週生徒の反応を見極めながら修正を加え、最終稿が完成し、授業案が出来上がるのは授業の1日前であった。2時間連続で生徒を引きつけるのは至難の業である。特に説明が多くなるワークの時は、身体を動かす「スペシャルワーク」を挿入しながら生徒の興味を持続させた。

3. 「人づくりのわーく」の工夫

4年前に実施した「こころのグループワーク」は、ワーク中心で、やりっ放しであった。今回は、ファイルを支給してプリントを綴じさせ、ワークの後に必ずレクチャーを入れて理論的な説明をするようにし、年に2回プリント持ち込みのペーパーテストをして、理論の定着を図ろうとした。

授業の最後の5～10分には、毎回「ふりかえりシート」を配布し、その授業で習得してほしいポイントと授業全体の満足度を10点満点で自己採点させ、コメントを書かせた。その結果を集計してプリントにし、次の時間の冒頭に生徒に配布して前回学んだことの確認をした。本来なら、授業の終わりにふりかえりの時間を取って、生徒同士で話し合わせることができれば完璧なのであるが、生徒の集中力はそこまでもたなかった。